2　柳宗悦「朝鮮人を想う」

（1）

自分は朝鮮に就て充分な予備知識を持っているわけではない。僅かに所有する根拠があれば，それは凡そ１ケ月の間朝鮮の各地を巡歴した事と，旅立つ前２，３の朝鮮史を繙いた事と，予てからその国の芸術に厚い欽慕の情を持っている此３つの事実だけである。

然し是等は僅かな根柢に過ぎぬかも知れぬが，今もだし難い情が余に此１篇を書かせたのである。余は以前から朝鮮に対する余の心を披瀝したい希いがあったが，今度不幸な出来事が起った為，遂にその期が来て余にこの筆を執らせたのである。

余は今度の出来事に就て少からず心を引かされている。特に日本の識者が如何なる態度で，如何なる考えを述べるかを注意深く見守っていた。然しその結果朝鮮に就て経験あり知識ある人々の思想が殆ど何等の賢さもなく深みもなく又温みもないのを知って，余は隣邦人の為に屢涙ぐんだ。

余は前にも云った様に朝鮮に就て何等の学識があるのではないが，幸いに余はその芸術に現れた朝鮮人の心の要求を味う事によって，充分な情愛を所有する一人であるのを感じている。余は屢想うのであるが，或国の者が他国を理解する最も深い道は，科学や政治上の知識ではなく，宗教や芸術的な内面の理解であると思う。云い換えれば経済や法律の知識が吾々を他の国の心へ導くのではなくして，純な情愛に基く理解が，最も深くその国を内より味わしめるのであると考えている。余は日本に於ての小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の場合の如きをその適例であると思っている。恐らく今迄ハーン程日本を内面から味い得た人は無いであろう。外国人の書いた日本に関する本が諸百あるか知らないが，ハーンの著作程その美さと鋭さと温かさに充ちたものはないであろう。彼は或日本人よりも日本を一層よく理解していた芸術家であった。芸術は実に鋭い直観の理解であるが，科学や政治は却て屢独断に充ち利己に傷ついた不純な理解であった。特に他人の心に触れ逢おうとする微妙な契機に対して，知よりも情こそ深い理解の道であろう。隣人との交りは只愛が結ぶのである。軍政や圧迫が人と人とを交ぶと誰が思い得るであろう。知でもなく刃でもなく只一つの情にこそ不思議な力がある。平和を愛する者はたえず微笑むであろう。怒号が何時何処で平和を齎らした場合があろうか。

朝鮮に住み朝鮮を語る人々の間にはまだハーンの様な姿は一人もないのである。その古墳を発き古芸術を集める人はあるかも知れぬが，それによって朝鮮に対する愛の仕事を果した人は一人もない様である。彼等は如何なる美を捕え得たであろうか。涙が嘗て彼等に湧いた事があるであろうか。日本は多額の金と，軍隊と，政治家とをその国に送ったであろうが，いつ心の愛を贈った場合があろうか。如何なる日本の芸術家が彼等の間にあったか。況んや如何なる日本の宗教家が朝鮮の霊を救おうとしたであろうか。余は思うのである。凡ての朝鮮人は金よりも政治よりも軍隊よりも，只一片の人情に，より多く飢えているのである。

（2）―（4）　（略）

（5）

吾々とその隣人との間に永遠の平和を求めようとなれば，吾々の心を愛に浄め，同情に温めるよりほかに道はない。然し日本は不幸にも刃を加え罵りを与えた。之が果して相互の理解を生み，共力を果し，結合を全くするであろうか。否朝鮮の全民が骨身に感じる所は，限りない怨恨である，反抗である，憎悪である，分離である。独立が彼等の理想となるのは必然な結果であろう。彼等が日本を愛し得ないこそ自然であって，敬い得ることこそ例外である。

人は愛の前に従順であるが，抑圧に対しては頑強である。日本は何れの道によって隣人に近づこうとするのであろう。平和がその希望であるなら，何の辯愚を重ねて抑圧の道を撰ぶのであろう。

金銭や政治に於て心は心に触れる事は出来ぬ。只愛のみが此悦びを与えるのである。殖民地の平和は政策が産むのではない。愛が相互の理解を産むのである。此力を越える軍力も政権もあらぬ。余は想う，国と国とを交び人と人とを近づけるのは科学ではなく芸術である。政治ではなく宗教である。智ではなく情である。只ひとり宗教的若しくは芸術的理解のみが人の心を内より味い，味われたものに無限の愛を起すのである。

日本は朝鮮を治めようとして軍人を送り政治家を送った。然し友情や平和の真意を知るのは宗教家であり芸術家である。余は習慣が国際の問題をひとり政治家にのみ委ねるのを奇異な幼稚な態度であると思う。余は古いソクラテスやプラトーンの如き又は孔子，老子の如き人々が真に一国の治平，万国の平和を語り得る人々であると確く信じる。

朝鮮の人々よ，余は御身等に就て何の知識もなく経験もない一人である。又今迄御身等の間に一人の知人をすら持っていない。然し余は御身等の故国の芸術を愛し，人情を愛し，その歴史が嘗めた淋しい経験に尽きない同情を持つ一人である。又御身等がその芸術によって長い間何を求め何を訴えたかを心に聞いている。余は余の心にそれを想う毎に淋しさを感じ，湧きくる愛を御身等に贈らずにはいられない。

朝鮮の人々よ，よし余の国の識者の凡てが御身等を罵り又御身等を苦める事があっても，彼等の中に此一文を草した者のいる事を知ってほしい。否，余のみならず，余の愛する凡ての余の知友は同じ愛情を御身等に感じている事を知ってほしい。かくて吾々の国が正しい人道を踏んでいないと云う明かな反省が吾々の間にある事を知ってほしい。余は此短い一文によって，少しでも御身等に対する余の情を披瀝し得るなら余には浅からぬ悦びである。（1919・5・11）

（柳宗悦著・高崎宗司編『朝鮮人を想う』）